

テムズ川の物語



平井杏子

コッツウォルド丘陵に源を発し、ロンドンを貫流して北海に注ぐテムズの長流ほど豊かな物語を抱えた河川は他にないだろう。英国屈指の滑稽小説、ジェローム・K・ジェロームの『ボートの3人男』(1889)は、3人の男と1匹の犬が、手漕ぎボートでこの川を遡る珍道中記だが、兩岸には遙か2千年を遡る歴史が刻まれている。ジェロームが執筆に使ったパブが中流のマーロウにある。河岸に建つのは、『釣魚大全』(1653)の著者アイザック・ウォールトンゆかりのホテルである。近くの閘門(ロック)あたりが気に入りの釣り場だった。1966年にテムズ・パスが川沿いに通ってから水辺に集まる人びとが増えた。ヨットやナロウボートが水鳥の傍らを流れて行くさまは、ジョン・コンスタブルの絵さながらの美しさだ。

アガサ・クリスティは、上流のウォリングフォードに終の棲家を定め、今も隣村チオルジーの教会墓地に眠っているが、ここマーロウの水際に建つミル・ハウスを殺人の舞台にした。『茶色の服の男』(1924)である。語り手のアンはその空き家を訪ね、「使い古した〈雰囲気〉という語の意味が初めてわかった」と呟く。残忍で不吉な気配を感じるというのだ。引用符で強調された“atmosphere”という語は本来、ギリシア語で〈気〉を表わすatmosと、〈地球〉を意味するsphairaが結合した科学用語であった。この語を効果的に使ったのは、エドガー・アラン・ポーの怪奇小説『アッシャー家の崩壊』(1839)である。朽ちた樹木や灰色の壁や腐敗した沼から滲み出る怪しい気を、ポーの語り手は「雰囲気」と言う。崩壊し淀んだ沼の底に飲み込まれるアッシャー家の最期を、アガサはこのマーロウの流れに見たのだろうか。

思えばテムズ川は、権力をめぐる抗争と人間の苦悶の歴史を水面に映し続けてきた。勝者の背後には敗者の影がつきまとう。流域に夥しい数のゴースト伝説がうごめいているのも故なきことではない。マーロウ対岸の水辺に建つスポーツクラブ、かつてのビシャム修道院にも、エリザベス1世の廷臣ホビー卿夫人が徘徊しているという噂だ。しかし川辺の魅力は富裕な人びとを招きよせ、河岸には豪邸が立ち並ぶ。少し上流のメイプルダラム・ハウスもそのひとつ。18世紀の詩人アレグザンダー・ポープは館の美人姉妹に恋をした。病を抱えていた彼はトゥッケナムの河畔で暮らしたが、死後墓荒らしに遭い、今も失くした頭蓋骨を探しているという。

メイプルダラム・ハウスは『たのしい川べ』(1908、原題『柳に吹く風』)の挿絵を描いたE. H. シェパードが、金持ちのヒキガエル館のモデルにした屋敷だ。モグラや川ネズミの水辺の暮らしを描いた童話である。著者ケネス・グレームは孤児となり、オックスフォード大学への進学は叶わなかったが、成功を収めたのちパングボンの村で暮らした。だが、家庭生活は苦悩に満ちたものであった。そういえばボートの3人男たちはこの近くの川面に、自害した女の水死体を発見したのだった。上流には、ルイス・キャロルが『不思議の国のアリス』(1865)のモデル、アリス・リデルと小舟に乗り込んだフォリー橋。オックスフォードは英国で人気の高い推理作家コリン・デクスターの生んだモース主任警部の活躍の舞台。彼はアガサ・クリスティの大ファンであるとか。テムズはそんな人びとの、さまざまな思いをつないで流れていく。

(ひらい きょうこ・昭和女子大学教授)